



若者達の巨大橋敷設工事
その後肉欲に任せ激しい乱交

長らく“聖なる川”と崇められ橋を架けることが許されなかった大きな河川に、このたび地元の村の住人達の手によって橋が架けられることとなった。

「はああ！！！！凄くやりがいのある仕事だったねえ！ロディ！」

「そうだね！クタクタだけど心地良いよ」

「この橋が完成すれば対岸へ苦勞なく行ける。その夢のためならどんな苦勞でも大歓迎ってなもんさ！」

「リミザの言うとおりでよ！」

その日の巨大橋敷設工事の仕事を終えた若者達は、汗だくの青い作業着を脱ぎ捨て、照りつける太陽の下橋から宿場へ帰る途中にある池の澄み切った水面に飛び込んだ。

この若者達の名はロディ（男）、ロハン（男）、リミザ（女）、ルイーザ（女）。男女二人ずつの男女班だ。

4人は合計で30もある橋杭の一つを組み上げる作業をしていたのだ。

“ザッパァァー——ンッッ！！！”

大きな水しぶきを上げて透明で美しい水が弾けとんだ。

大きく延々と南へ続くひたすら長い川がある。

そして長らく、その川に橋が架かっていないことは村の住民たちの悩みの種であった。

古代より村には、この川が“神々の通り道である聖なる川”であるという言い伝えが存在した。そしてその言い伝えを遵守するという確固たるしきたりにより、橋を架けることが許されなかったのだ。

さらにこの川は川幅が優に100メートルを超える巨大な川であり、おまけに凶暴な肉食魚や猛毒プランクトン、そして襲われればひとたまりもない人食いワニの巣窟だったため、とてもではないが一筋縄で渡ることが出来るものではなかった。

川の向こう岸へ行くためには村から約150キロも離れた上流の大

橋まで行かなければならず、その事実は内燃機関（エンジン）を持たず、徒歩かあるいは馬車しか移動手段を持たないこの村の住人達にとって大きな悩みの種であった。

対岸の町にはこの村にはない色とりどりの市場がある。さらには香辛料があり、そして優雅な踊り場ある。

この川の向こう側は、村の住人達にとって夢の世界のような場所であった。

“昔からの言い伝え”

ずっとずっと、この村の住人達はそれが大切だと教えられ育ってきた。

しかし、ここ近年で若者達の数が増えているこの村には次のような声が聞かれるようになっていた。

“そんな言い伝えなどぶち壊してこの川に橋が架けたい”

そして時を追うごとにその意見は強まり、次第に村全体が川の神聖さを重んじるより自分達の欲望を優先すべきだという風情に変わっていった。

そしてついに、最後の最後まで橋の設置を反対し続けていた村長を住人の若人達が一致団結し、村の山の太い木の幹にくくり付けて排除してしまったのだ。

邪魔者がいなくなった村。

若者達は自分達の意志を勝ち取ったのである。

「これで橋の設置決定は俺達のものだ！決して跨（またが）ってはならないとされていたこの川に橋を架け、堂々と向こう岸まで歩ける時が来るのだっ！！」

長らく形のない“しきたり”と言う名の束縛に抑圧され鬱憤すら溜まっていた若者達は、堤が取り崩された川の水ようなどこまでも広がる開放感に浸りながら橋の敷設工事を始めたのだ。

足場の確保のため、一部の川の流れを堰き止めながら、若者たちは

本来の稼業すら放置して皆で協力し合い、猛スピードで橋の設置を進めていった・・・。

ザパァッ！！

「ンプハァッ！！やっぱり仕事でかいた汗を洗い流すのって気持ちいいなあ！！」

ロハンが水面から顔を出して叫ぶ。

「じゃあそろそろ宿場へ帰りましょうよっ！」

ルイーザが笑った。

その日の工事を終えた4人。

4人は全員が22歳と若い。

4人は池に飛び込んだ時から体に何も身につけていない。素っ裸だ。意気揚々と大手を振って、4人は工事の拠点である宿場へ戻っていく。

暮れ始めた空を眺めながら・・・。

ちなみにこの橋の敷設工事が始まる前、ロディとロハンは近くの穀粉を製造する水車小屋で、ルイーザとリミザは製糸工場で働いていた。

橋を組み立てていく班決めの際、10代の頃同じ私塾に通っており、仲が良くてチームワークが抜群と判断されたこの4人は同じ箇所を任されることとなった。

橋の工事では男も女もない。いち早く完成させるべく、若人達が総出で工事に望んでいるのだ。

そして、出来る限り早い期間で完成させるべく進められている工事であるため、労働者の若者達は各々の宅に戻ることをせず、近くに設けられている“宿場”を拠点として工事労働に励んでいる。

裸の4人が宿場に向かって歩く。

肉体労働を終えた後であるにも関わらず、4人は元気一杯だ。

普段からそれなりの肉体労働をしている4人はそろってカラダも逞しく、筋肉質で、健康体そのもの。もちろん女子であるルイーザとリミザもだ。

4人は臨時で設けられたテント型の宿場へ戻ってきた。

その間も4人は何も衣服を身につけていない。工事現場付近に村の民家はなく、村の老人・子供たちに見られることもないため、橋の敷設工事に励む若者達は実に開放的になっているのだ。

バサッ！！

ロディが宿場のテントの入り口を重ねて閉じた。

「じゃあ始めましょ！みんな体力は残ってるわね??」

ルイーザが自分以外の3人に声をかけた。

「当然さ、まだまだ元気だぜ！！」

意気込んだロハンのペニスは既に最大に勃起していた。

———体験版はここまでです———